



協和國語讀本

指導要領

中央協和會 財法人團



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

inches 1 2 3 4 5 6 7 8 cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

Black

3/Color

White

Magenta

Red

Yellow

Green

Cyan

Blue



協和國語讀本

指導要領

中央協和會 財団法人

東京外国語大学
図書館蔵書

673712

平成 23 年度

目次

緒言	一
教材の取扱	一
一 コトバ	一
二九 プンシヨウ	三
十 アイサツ	三五
十一 ミチデ	三七
十二 カヒモノ	三八
十三 ハウモン	三九
十四 國語ノケイコ	三三
十五 國旗	三三
祝日、大祭日、記念日	
十六 オテツダヒ	三六
十七 婦人會	三七
十八 大詔奉戴日	四一
十九 生活カルタ	四三
いろは歌	
二十 天皇陛下	四六
海行かば	
二十一 はがき	四八
二十二 朝鮮より	五〇
二十三 まごころ	五二
二十四 愛馬進軍歌	五四
二十五 神社参拜	五五
二十六 日の本	五九
愛國行進曲	
補説	六〇

協和國語讀本指導要領

緒言

一、國語を指導するに當つて最も肝要なことは、指導態度である。既に異語を有する者に、國語を修得せしめるのは、指導者の指導のもとに、反復練習させることによつて用を辨せしめるに至るものである。随つて、指導者は、あたかも父母兄弟の如きいたはりの態度を持し、發音抑揚の不備をはじめ、語彙の選擇の不適切、語法の不正確に至るまで、意味の通ずる限りこれを認め、かたことめいた話しぶりによつてその意圖を知り、國語に對する親しみを持たせると共に、これが使用の興味と勇氣とを喚起することにとづつめ、國語で話さうとする意慾の涵養と、態度の育成とにとづつめなくてはならない。指導者が發音・語法の正確、または、用語構文の的確を期するあまり、最初から批正を嚴密に行ふときは、學習者は興味と勇氣とを失ひ、國語學習の意慾さへ失ふに至るであらう。入門に當つては、細瑕を厭はず、その大成を將來に期することが肝要である。

かくの如くして國語學習の興味を喚起し、大膽、自由に會話しようとする傾向を養ひ、やがて學習の

進むに従ひ、用語・構文・發音・語法等の批正に着手し、次第にその上達を期し、漸く國語に親しむ心を啓發しつつ、漸次文章の讀解に導くべきである。文章の讀解も、その基礎は會話を主とする音聲表現が根本であり、徒らに文字の指導にとらはれることなきやう留意すべきである。

一、本書は、學習指導の方法を、時間を單位として計畫せず、教材を單位として立案した。これは、學習の時・所・位に適切な指導たらしめるために繁簡伸縮を圖る便に供しようとしたためにほかならない。

一、巻頭「宮城」の繪については、こゝに「テンノウヘイカ」がましますことを語り敬虔の心をもつて禮拜すべきことを指導者の態度を以て示し、言葉の理解の進むにつれて指導を深める。「君が代」は、國歌であり、その奉誦は國民として、必須緊要缺くべからざるものである。よつて歌唱によつて「君が代」の歌を暗誦せしめ、歌ふことを得しめなければならぬ。しかし、初めから一語一句の解釋は、必要のないことで、初めは歌へさへすればよいことにし、漸次指導の程度を深めてゆくべきである。

次に掲げた「教育ニ關スル勅語」は、皇國臣民として心得べき國民道德の根本を示されたものであるから、初めは指導者の奉讀の際、學習者は敬禮・低頭して、謹聽する態度を訓練し、感情的に理會する態度を馴致し、國語理會の進度に應じて指導を深めるべきである。

以上の指導は學習の全期を通じて行ふべきことで、ある時間に一度指導してそれで終るべきではない。一、「一コトバ」繪畫とコトバを併記して、五十音順に排列し、専ら發音の練習と語彙の擴充に供へ、國

語音を習得せしめると共に語彙を與へて爾後の文型修練の素材を習得せしめんとするものである。二から九までは一コトバと合はせて、國語學習の入門者に對する最初の指導である。まだ一語も國語を解しないものを相手として國語の初歩を學習させようとするのであるから、指導者と學習者とが、意志を通じ合ふ方法は、指示・身振・表情・動作の如き、身體的表現のほかにはないといふ豫想のもとに着手しなくてはならない。この身體的表現を手がかりとして、話言葉を、しかも必須で簡単な極めて基本の國語を聴く力と話す素地を得させるために課する第一段階である。

十から十六までは、會話の基本的教材を示したもので、九までの言語訓練に基づいて、聴くこと話すことの練習を通して會話の要領を理會させるのである。日常會話に於ける表現形式と、多少ちがつてゐるものもあるが、言語訓練のために設けたものであるから、體得するまで練習させるべきである。

十七から十九までは主に片假名で、二十からは平假名による簡易な文章教材を掲げたのである。文章とはいへ、韻文をのぞく他のものは、十六までの指導態度のもとに、言語訓練に主眼を置いて指導すべきである。韻文教材は、暗誦させ歌はせるやうにすべきである。

一、巻末の五十音圖は、發音の練習と、文字の練習とを總括的に指導するために設けたものであり、地圖は、交通圖を主としたものであるが、これによつて初歩の地圖の見方を指導すべきである。

一、本書の各課に記した指導要領は、各教材による話言葉の學習乃至は文章讀解のために、必要と思はれ

る問答なり方法を、計画的に示したものである。随つて、實際の指導に當つては、その學習者の力に應じ場所に應じて問答、方法を加除伸縮して、適切を期することが肝要である。

一、本書の指導をなす上に、更に基礎となるべき教室作法と教室用語を示すことにする。

(イ) 教室作法

○挨拶

指導者と學習者とが顔を合はせた時、指導者は先づ、

オハヤウ (コンバンハ、コンニチハ)

といふ。學習者は初めの間は、ただ聞いてゐるだけでよいけれども、なるべく早い時期に、學習者にも、同時に、

オハヤウ (オハヤウゴザイマス、コンバンハ、コンニチハ)

といはせる。この言葉の指導と共にこの言葉を發する時の態度身振り、表情の指導も忘れてはならない。

○點呼

シユツセキヲ トリマス

といつて、名簿によつて、名簿がなければ、他に適當な方法によつて學習者の一人々々を

□□サン

と呼び、それぞれ

ハイ

と答へさせる。但し、最初の時間においては、ただうなづくだけでもよい。これもやはり、なるべく早い時期において

ハイ

といはせる。指導者の自問自答でそこへ導くのもよい。いづれにしても、名を呼び、それに答へることは、相互の親愛を深める。教室内に限らず、機會あるごとに點呼を行ひ、なるべく早く名をおぼえて呼ぶことは、指導上大切な用意である。

○挨拶

手振りとともに

オタチナサイ

といひ、全員を起立させ、

サヤウナラ

といひ、頭を下げさせた後に退散させる。だんだん學習者が「サヤウナラ」といへるやうにするのは、もとより望ましい。
なほ挨拶は教室以外でも、機會ある毎に行ひ、自然に學習者の方からこれを行ふやうに導くことが大切である。

(ロ) 教室用語

教室に於ける學習指導の實際に當つて、その時、その場合の必要に應じ、必要な言葉を提示することは自然に且つ、容易に國語を理解・修得させることに非常に役立つものである。即ち次のやうな用語を作業中に織りこんで、自由に頻繁に用ひ、歸納的に會得させるべきである。

ワカリマスカ
ワカリマシタカ
ワカリマセンカ
ヨロシイ
チガヒマス

ヨク デキマシタ
チヨツト オマチナサイ
シツモンガ アリマスカ
○○ ページヲ オアケナサイ
ソコマデ (ソレマデ)

サイ

サア イツシヨニ イツテゴランナ
サイ (イヒマセウ)

ミンナ イツシヨニ

□ □ サン イツテゴランナサイ

サウデス ヨク デキマシタ

センセイガ サキニ イツテミマセ

ウ

センセイノ クチモトヲ ゴランナ

サイ

センセイノ マネヲシナサイ

ソノツギ

ヒトリヅツ イツテゴランナサイ

……ノ ハウガ ヨロシイ

ダレカ イヘマスカ

コレハ コクゴデ ナントイヒマス

カ

コクゴデ イツテゴランナサイ

タツテハイケマセン

サワイデハイケマセン

ワキミヲ シテハイケマセン

コレヲ (コチヲ) ゴランナサイ

チコクヲ シテハイケマセン

カネガ ナリマシタ

ケフハ コレデヲハリマス

ヨク オキキナサイ

モウ イチド イツテゴランナサイ

オホキイ コエデ イツテゴランナ

.....テシマヒマス
テアゲマス
テヤリマス
テクダサイマス
テクレマス
テクダサイ

.....ト ミエマス
テモ ヨロシイ
コトガ アリマス
コトニ シマス
コトニ ナリマス
 シマヒマセウ (ヲハリ)

教材の取扱

一 コ ト バ

要 旨

五十音順に排列された名稱を發音訓練を主にして把握させ、五十音圖の文字を習得せしめると共に、「コレハナンデスカ」「○○デス」「ソレハ○○デス」の基本文型に習熟せしめる。

要 領

指導者は先づ挿畫を示しながら、「コレハナンデスカ」と問ひながら「○○デス」と自問自答し、繪にある事物の名稱を繰返して學習者に聴かせ、聴き方を十分にさせることによつて、事物と名稱との觀念聯合をはかる。

聴き方が十分に行はれた後、指導者のいふのを聴いて、學習者も一齊にいふ。この際、指導者は學習者にいはせることにより性急であつてはならない。十分聴き取つてゐない者に早くいはせると、誤つた發表習慣がつき、學習者を常に不安な状態におくから、却つて話し方に對する熱意と自信とを失はせる。指導者は學習者の反應に注意し、指導者が事物(挿畫)を指し示しながら、「コレハナンデスカ」

といつて一瞬時躊躇すると、學習者が思はず「イスデス」といひたい衝動を示す時期を見ていはせるといふやうにしないでならない。殊に繪畫教材の段階に於いては、語言葉の正しい習慣法である耳より口への習慣を養ふための準備行為であるから、話し方學習に於いても、先づ指導者がいひ、その聴覺像が、學習者の腦裡から消去らぬ中にはせざるやうにしないでならない。

なほ、この事物の名稱を聽かせるに當つては、指導者は常に「コレハナンドスカ」の間ひに對する答として、單語でなくて、文的語として印象させることを忘れてはならない。

「○○デス」の構文で各事物の名稱が會得されたら「コレハ○○デス」を指導し、次に、事物を學習者の近いところに移し、指導者は離れた所に立つて、「ソレハ○○デス」の「ソレハ」の意味を直接に會得させる。なほ「コレハ○○デス」と交互に使用させて何回となく繰返して理解を深める。

次に「コレハナンドスカ」の間ひに對して、「ソレハ○○デス」の練習を行はせる。

これらの練習の際は一齊に行つたり、指命して行つたりするが、常に全體のものが、活動するやうに次々に指命したり、席順を縦横に指命したりして安心してゐる者のぬないやうにすることが必要な技巧である。

文字の指導

以上のことが相當自由に行へるやうになつてから、こゝに掲げられた語彙に即して五十音圖の文字の

指導を行ふ。はじめは文字が読めさへすればよいが、文字を正確に記憶させるためには、書く作業を加へることが効果を増すものである。書き方を指導する際には筆順をよく會得させることが大切である。

注意 誤られやすい音

一、濁音と清音の誤

例 ダイコン——ダイコン バゲツ——バケス ガクカウ——カツコ ゲタ——ケダ

一、ツ の 誤

例 クツ——クス ツクエ——スクエ ゴモツ——ニモス

二

要 旨

「○○ガアリマス」の文型に習熟させると共に、「イス、ホン、トケイ、ツクエ、コシカケ、コクバ」等の名稱を理解させる。

要 領

一コトバの指導を復習し、文型に習熟させて本課に入る。

先づ本を手に持つて「コレハホンデス」といひ、この本を卓上において「ココニホンガアリマス」ホ

二 ブン シ ヨ ヲ

三

ンガアリマス」といふ。「イス、トケイ、ツクエ、コシカケ、コクパン」等についても同様に數回反復する。次に「ココニナニガアリマスカ」「ソコニナニガアリマスカ」の自問を發し、「○○ガアリマス」の形で自答する。この反復の後に、指導者の「ココニナニガアリマスカ」の發問に對して、「○○ガアリマス」の答が一齊に得られなければならない。

聽き方話し方ができるやうになつたら、本の讀みを指導する。まづ、指導者の讀みを聽かせる。ゆつくり、大きく、發音を正しく讀む。數回繰り返してから、「イスガアリマス」と讀み、次に學習者に「イスガアリマス」と讀ませる。以下すべて正しい範讀について學習者の模倣讀を行はせ、次第に一人で讀めるやうに導く。

指導すべき語はこゝに掲げられたものだけに限らず教室にあるものは、自由に提出すべきである。

口頭練習問題

- コレハ ホンデスカ、
- △ハイ、サウデス。
- コレハ トケイデスカ、
- △イイエ、サウデハアリマセン。
- ソレデハ コレハ ナンデスカ、
- △ホンデス。
- コレハ ホンデスカ、ツクエデスカ、
- △ホンデス。

- コレハ コシカケデスカ トケイデスカ
- △トケイデス。
- ホンハ ツクエノ ウヘニ アリマスカ、
- △ハイ、サウデス。
- ホンハ コシカケノ ウヘニ アリマスカ、
- △イイエ サウデハ アリマセン。
- ホンハ ドコニ アリマスカ、
- △ツクエノ ウヘニ アリマス。
- ツクエノ ウヘニ ナニガ アリマスカ、
- △ホンガ アリマス。
- イスノ ウヘニ ナニガ アリマスカ、
- △ナニモ アリマセン。
- ホンハ イスノ ウヘニ アリマスカ
- ツクエノ ウヘニ アリマスカ、
- △ツクエノ ウヘニ アリマス。
- コレハ ナンデスカ、
- △コシカケデス。
- ソレハ ナンデスカ、
- △コクパンデス。
- アレハ ナンデスカ、
- △トケイデス。

要

旨

「○○ガアリマス」「○○ト○○ガアリマス」の文型に習熟させ、挿繪により「ナベ、カマ、バケツ、コンロ・ヒバチ・カガミ・デントウ」の名稱を理會させる。

要領

先づ挿畫を指し示して、「コレハナベ(カマ、バケツ、コンロ、ヒバチ、カガミ、デントウ)デス」といひ、次に「ココニナベガアリマス」といふ。その他の器物についても同様に數回反復する。

次いで「ココニナベガアリマスカ」と自問して、「ナベガアリマス」「ソコニナベガアリマス」(以下他の器物も同様)と自答する。教材のすべてに亘つてこの自問自答をする間に、學習者は聽き方を反復し、ついで、「コレハナベデスカ」と發問する「ナベデス」「ソレハナベデス」(他教材も同様)と答へればよい。これによつて、器物の名稱を確實に習得させる。

器物の名稱を習得したとき、「ココニナベガアリマスカ」と發問し、學習者の「ソコニ○○ガアリマス」または、「○○ガアリマス」の答を一齊に得ればよい。

次に「ナベトカマガアリマス」「バケツトコンロガアリマス」といふやうに二個のものを併せていひ、指導者は、ことごと、一つ一つ指し示す動作とを聯關させて學習者に「ト」の使用を聽き取らせる。更に、「ナニトナベガアリマスカ」と自問し、「○○ト○○ガアリマス」を自答することを繰り返しかへし、次いで、指導者は、挿畫を指し示しながら「ナニトナベガアリマスカ」と問ひ、學習者が、「○○ト○○ガアリマス」と指導者の指示したものを間違ひなく發表するやうになればよいのである。

言葉の習得は何よりも反復練習が必要であるから、既習の事物の名稱をあらゆる場合に材料として取扱ひ、また既習の構文・語型は、常に新しい語型の指導に先だつて反復練習するやうに心がくべきである。

發音上の注意 カマ(釜)とカマ(鎌)とのアクセントについて注意せしめる。バケツがバケス、デントウがデントになりがちであるから注意を要する。

口頭練習問題

- コレハ バケツデスカ コンロデスカ、
 △バケツデス。
 ○ツクエノ ウヘニ ホンガ アリマスカ、
 △ハイアリマス。
 ○ツクエノ ウヘニ エンピツガ アリマスカ、
 △ハイ、アリマス。
 ○ツクエノ ウエニ ナニガ アリマスカ、
 △ホント エンピツガ アリマス。
 ○コノ エノ ナカニ ナベト カマガアリマスカ、
 △ハイ、アリマス。
 ○コレハ ヒバチデスカ、カガミデスカ、
 △カガミデス。

○コレハ トケイデスカ、

△イイエ、デントウデス。

四

要

旨

「○○ガキマス」「○○ト○○ガキマス」「○○ガキマスカ」「ハイ、キマス」「イイエ、キマセン」の文型に習熟させ、「ウシ、ウマ、ハト、カラス、ウサギ、ネズミ、アヒル」等の名稱を知らせる。

要

領

まづ挿畫によつて、一々の動物を指し示しながら、「コレハウシデス」「コレハウマデス」「コレハハトデス」といふやうにして動物の名稱を授ける。

次に「ウシガ、キマス」「ウマガキマス」と挿畫を指し示しながらいつて動物の「ウシ・ウマ等」の存在を示し、「ナメガアリマス」「カマガアリマス」といふ前頁と對比させ、以下同様にして、動物の各々がそれぞれ「○○ガキマス」であり、器物の各々がそれぞれ「○○ガアリマス」であることを挿畫を指し示しながら、指導者が對比しつつ發聲することによつて、大體無生物には「アリマス」を、人や動物には「キマス」を用ひることを理會させる。

並列敘述である「○○ト○○」の構文は、前頁教材の取扱と同様の態度をとつて反復すればよい。

以上の二つの敘述形式が了得されたならば、「○○ガキマスカ」「ハイ、キマス」「イイエ、キマセン」の肯定、否定文型に習熟させる。

随つて、本教材では、先づ動物の名稱を授けることが先決問題で、それに基づき、順次語型の變化した形を求めて一般生物の存在を敘述することに慣れさせる。

なほ進んで、「ココニナニガキマスカ」と發問して「ココニ○○ガキマス」または、「ソコニ○○ガキマス」が答へられるやうにまで指導することが肝要なことである。

「ココ、ソコ」「コレ、アレ」等は指示する事物との距離によつて生ずるものであることは、特に留意して指導しなければならない。

「一ことば」に於て既習の「ネコ」「イヌ」「ブタ」等を十分活用することはいふまでもない。

口頭練習問題

○ツクエノ ウヘニ ナニガ アリマスカ、

○コノ エノ ナカニ ナニガ キマスカ、

△ホンガ アリマス。

△ウシガ キマス。

○コレハ ナンデスカ、

○コノ エノ ナカニ ヒバチガ アリマ

△ウシデス。

スカ、

- △ イイエ、アリマセン。
- コレモ ウシデスカ、
- △ イイエ、コレハ ウマデス。
- コノ エノ ナカニ ウシト ウマガキマスカ、
- △ ハイ、キマス。
- ヒトモ キマスカ、
- △ イイエ、キマセン。
- コノ ヘヤニ ウシガ キマスカ、
- △ イイエ、キマセン。
- コノ ヘヤニハ ナニガ キマスカ、
- △ ヒトガ キマス。
- コノ ヘヤニハ ナニガ アリマスカ、
- △ ツクエト コシカケガ アリマス。

- コクバンモ アリマスカ、
- △ ハイ、アリマス。
- ウサギハ キマスカ、
- △ イイエ、キマセン。
- カラスハ ツクエノ ウヘニ キマスカ、
- △ イイエ、キノ ウエニ キマス。
- コレハ ハトデスカ アヒルデスカ、
- △ アヒルデス。
- コレハ ウサギデスカ ネズミデスカ、
- △ ネズミデス。
- ウシト ウサギト ドチラガ オホキイノデスカ、
- △ ウシノ ハウガ オホキイノデス。
- ウマト ネズミト ドチラガ チヒサイ

ノデスカ、

- △ ネズミノ ハウガ チヒサイノデス。
- ウサギト ネズミデハ ドチラガ オホキイノデスカ、
- △ ウサギノ ハウガ オホキイノデス。
- ハトト アヒルデハ ドチラガ チヒサ

イノデスカ、

- △ ハトノ ハウガ チヒサイノデス。
- ウマハ ウサギヨリ オホキイノデスカ
- チヒサイノデスカ、
- △ ウマハ ウサギヨリ オホキイノデス。

五

要 旨

「フトイ」「タカイ」等の形容詞の用法を學習させると共に、「アリマス」と「キマス」の相違の理會を深める。

要 領

先づ挿畫(掛圖)によるか、實物を用意するかして、直觀と言語とを結ぶやうにすることが肝要である。

「コレハナンデスカ」と繪畫を指し示し、「コレハ(ソレハ)キデス」「ソレハ(コレハ)イトデス」「コレハ(ソレハ)イヌデス」と答へさせる。この際「キ」「イト」「イヌ」の名稱は指導者が「コレハ○○デス」といつて繰り返かへして理解させる。

然る後、「ココニナニガアリマスカ」を指し示し、「キガアリマス」「イトガアリマス」と答へさせる練習をする。

次に繪畫を指し示し「コレハフトイキデス」「コレハホソイキデス」「コレハタカイ(ヒクイ)キデス」と數回反復した後、「コレハ」といひながら太い木を指し示しながら尋ねる身振りをする。「フトイキデス」を一人々々答へさせる。同様にして「ホソイ(タカイ、ヒクイ)キデス」を練習し、次いで全くこれと同様な方法によつて、「ココニフトイキガアリマス」といつて繪畫と照應しつつ繰り返かへす。次に糸の實物を用意して、糸の長いものを取上げて「ココニナニガイトガアリマス」といひ、短い糸を取上げて「ミジカイイトガアリマス」といふやうに「アカイ」「アライ」糸も取扱ふ。

次に「ナニガキマスカ」と犬の繪を示しながら問ふ、「イヌガキマス」の答を一人々々答へさせて、後、「クロイ」「シロイ」「マツシロイ」「マツクロイ」の指導を前項同様反復して理會させる。

聽き方話し方ができたら、讀本を持たせ、文字をたどりながら讀みを指導する。

なほ、既習の言葉を利用して、これらの形容詞の指導をすることが肝要である。

口頭練習問題

- コレハ ナンデスカ、
△イトデス。
- コレハ ナガイ イトデスカ ミジカイ
イトデスカ、
△ナガイ イトデス。
- コレハ アライ エンビツデスカ アカイ、
イ エンビツデスカ、
△アライ エンビツデス。
- アレハ ナンデスカ、
△キデス。
- アレハ フトイ キデスカ ホソイ キ
デスカ、
△フトイ キデス。
- タカイ キデスカ ヒクイ キデスカ、
△タカイ キデス。
- コノ イスハ タカイ イスデスカ ヒ、
クイ イスデスカ、
△タカイ イスデス。
- コレハ アカイ ホンデスカ アライ
ホンデスカ、
△アカイ ホンデス。
- コレハ イヌデスカ ネコデスカ、
△イヌデス。
- クロイ イヌデスカ シロイ イヌデス
カ、
△クロイ イヌデス。

- 「フトイ」ノ ハンタイハ ナンデスカ、
- △「ホソイ」デス。
- 「タカイ」ノ ハンタイハ ナンデスカ、
- △「ヒクイ」デス。
- 「ナガイ」ノ ハンタイハ ナンデスカ、
- △「ミジカイ」デス。
- 「オホキイ」ノ ハンタイハ「チヒサイ」

- デスカ、
- △ハイ、サウデス。
- 「ナガイ、イト」ノ ハンタイハ「ミジカイ、イト」デスカ「フトイ、イト」デスカ、
- △「ミジカイ、イト」デス。

六

要 旨

「○○テキマス」といふ動詞の現在進行形を修得させ、「○○ガ○○テキマス」といふ文型を練習させ語彙を擴充する。

要 領

この取扱は、「アリマス」「キマス」のやうな存在を表す言葉とちがつて、これは動作を表す言葉で

あるから、實際の動作によつて修得させることが必要である。

指導者は先づ教壇の上に立つて「ワタクシハタツテキマス」といひ、壇上に坐つて、「ワタクシハスワツテキマス」といひ、學習者をさして「アナタハコシカケテキマス」學習者を坐らせて「アナタハスワツテキマス」を何回となく繰返していふ。次に、「ワタクシハタツテキマスカ、スワツテキマスカ」と問ひ、「タツテ(スワツテ)キマス」を一人々に答へさせる。

次に、指導者は歩きながら「ワタクシハアルイテキマス」とはつきり何回もいふ。次に走る姿勢をとり、少し走りながら「ワタクシハハシツテキマス」と何回もくりかへす。

次に繪畫(略畫)を用意してあるものを提示して、「○○ガアルイテキマス」「○○ガハシツテキマス」をくりかへし、順次、他の語に及ぶ。先づ主體的ないひ表し方から、はじめ次に客觀した言ひ現し方を練習するやうにするのがよい。

この教材のやうに、第三人稱的人物の動作は、指導の必要に應じて示すことは困難である。随つて適當な事實が発見せられた際は、必ずこれを活用するやうにとめる。教室指導の際は掛圖や略圖で行ふより方法がない。

なほこの種の教材は簡単な動作そのものの言葉を教へるのが主眼であるから、本文を分析して教へるよりは、全體の動作を一單位として把握させ、また、同一の動作ばかり繰返して教へるよりは、比較に

よつて一聯の動作を同時に指導するのが適當である。

口頭練習問題

- サンハ タツテキマスカ スワツテキマスカ、
- △スワツテキマス。
- サンハ アルイテキマスカ、
- △イイエ、ハシツテキマス。
- コノ エノ ナカニハ ナニガ キマスカ、
- △ヒトガ キマス。
- ナニヲ シテキマスカ、
- △ハタライテキマス。
- コノ ヒトハ ヤスンデキマスカ ハタライテキマスカ、

- △ハタライテキマス。
- コノ ヒトハ アソンデキマスカ、
- △イイエ、ハタライテキマス。
- ワタクシハ イマ タツテキマスカ スワツテキマスカ、
- △タツテキマス。
- ワタクシハ イマ アルイテキマスカ ハシツテキマスカ、
- アルイテキマス。
- アナタガタハ タツテキマスカ スワツテキマスカ、
- △スワツテキマス。

- ヤスンデキマスカ ベンキヤウシテキマスカ、

- △ベンキヤウシテキマス。

七

要 旨

「○○ハ○○デス」の文型に習熟させると共に、副詞・形容詞の用法を修得させ、併せて語彙を擴充する。

要 領

指導の要領は既に既出の教材の取扱に於ける要領の項で説明したところのものであるが、ここでは、更にそれらの復習をかねて反復練習させる。形容詞・副詞の用法についても五の教材指導の要領で説明したやうな態度と方法によつて、新しい語彙を用ひて同様の要領で指導すればよい。而して、以上の練習によつて、聴き方、話し方の習熟練習ができたならば、讀本によつて、讀むことへ進展させ、ことばと文字の聯關指導をすればよい。あくまで聴話の練習の後に、文字の讀みの指導を行ふべきことは従前と異なる。

口頭練習問題

- コレハ ナンデスカ、
- △ハナデス。
- コレハ キレイナ ハナデスカ、
- △ハイ、サウデス。
- コレハ ナンデスカ、
- △エデス。
- キレイナ エデスカ、
- △ハイ、サウデス。
- コレモ キレイナ エデスカ、
- △イイエ、サウデハアリマセン。
- コノ ハナモ キレイデスカ、
- △イイエ、コノハナハ キレイデハ アリマセン。
- コレハ ナンデスカ、

- △ノハラデス。
- ドンナ ノハラデスカ、
- △ヒロイ ノハラデス。
- コレハ ヒロイ ミチデスカ。
- △イイエ、セマイ ミチデス。
- コレハ イトデスカ、
- △イイエ、ナハデス。
- ドンナ ナハデスカ、
- △ツヨイ ナハデス。
- コノ イトハ ツヨイノデスカ ヨワイノデスカ、
- △ヨワイノデス。
- コレハ ナンデスカ、
- △マルイ イシデス。

- コノ イシハ オモイノデスカ カルイノデスカ、
- △カルイノデス。
- コノ イシハ カルイノデスカ、
- △イイエ、コノ イシハ オホキイ オモイ

- イ イシデス。
- 「ヒロイ」ノ ハンタイハ ナンデスカ、
- △「セマイ」デス。
- 「ヨワイ」ノ ハンタイハ ナンデスカ、
- △「ツヨイ」デス。

八

要 旨

場所を限定する副詞的修飾語としての「○○ノナカニ」の用法を修得させ、十までの数へ方に習熟させる。

要 領

既習の「ココニ(ソココニ)」といふ語型を基礎として、その練習から「○○ニ」を一層精しく限定した「○○ノナカニ」を、眼前の事実として練習させ、修得させる。

事実の箱の中に卵を入れたものを示し「ハコノナカニタマゴガアリマス」を数回繰返す。次に讀本の

文字を讀ませ、また本を離れて會話として練習させる。

なほ、「ナカニ」と對比して「〇〇ノツトニ」「ウヘニ」「シタニ」等の副詞的修飾語もこの教材の指導に聯關して取扱ふのが適切である。而して、以上の指導は、何れも眼前の事物に即して會話の形でそれを學習させ、十分練習した上に、讀本の文字を取扱ひ、練習に備へさせるべきである。

小石を十箇用意し、一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、八つ、九つ、十といつて一箇づつ十までの數へ方を何遍も繰返す。指導者が、「ひとつ」といひ、それについて學習者が一齊に「ヒトツ」といふ、同様に一語づつ、小石を一箇づつ机上におきつつ順次十まで唱和する。

次に小石を一つ取つて机上におき「ヒトツ」といはせて、黑板に「一ツ」と書き、再び「ヒトツ」といはせる。更に一つ取つて机上におき「フタツ」といはせ黑板に「二ツ」と書き、「フタツ」といはせる。同様にして「十」まで行ふ。

次に小石の場合と同様の要領で、掛圖（又は略畫）を指し示しつつ、金魚の數へ方「一ビキ」「二ビキ」を順次如上の様式で「十ビキ」まで練習する。

次いで「オカネ」「ハガキ」「ヒト」「エンピツ」「ジドウシヤ」を材料として、「一錢二錢・一圓二圓」「マイ」「人」「ボン」「ダイ」の名稱による數へ方の指導をする。

數へ方は應用が廣い言葉であるから、一語一語發音を正確に練習させることが大切である。なほ、數へるものによつて數へ方の稱呼が異なる點に注意が肝要である。

注意すべき事項として、序數詞と量數詞との區別をはつきり指導し、會得させるやうにすることが肝要である。

本教材においても、前課同様、聽話による會話的練習の後で、讀本の讀み及び、文字の指導をすべきである。必修漢字の指導も、最後に、筆順を正しく讀むこととともに書くことの指導も行ふべきである。

口頭練習問題

- コレハ ナンデスカ、
 △タマゴデス。
 ○オホキイ タマゴデスカ チヒサイ タマゴデスカ、
 △オホキイ タマゴデス。
 ○タマゴハ ツクエノ ウヘニ アリマスカ、
 △エンピツガ アリマス。
- コレハ ナンデスカ、
 △イイエ、ハコノ ナカニ アリマス。
 ○ハコノ ナカニハ タマゴガ イクツ アリマスカ。
 △トラ アリマス。
 ○ツクエノ ウヘニハ ナニガ アリマスカ、
 △エンピツガ アリマス。

- ナンボン アリマスカ、
- △イツボン ニホン サンボン。サンボン
アリマス。
- アカイ エンビツハ ナンボン アリマ
スカ、
- △イツボン アリマス。
- イケノ ナカニ ナニガ キマスカ、
- △キンギヨガ キマス。
- ドンナ キンギヨデスカ、
- △キレイナ キンギヨデス。
- ナンビキ キマスカ、
- △ジツビキキマス。
- サン イツビキカラ ジツビキマデ
イツテゴランナサイ、

- △イツビキ、ニヒキ、サンビキ、……。
- サン イツボンカラ ジツボンマデ
カゾヘテゴランナサイ、
- △イツボン、ニホン、……。
- ヒトラ カゾヘル トキニハ ナント
イヒマスカ、
- △ヒトリ、フタリ ト イヒマス。
- サン、ヒトリカラ ジフニンマデ
カゾヘテゴランナサイ、
- △ヒトリ、フタリ、サンニン、……。
- カミヤ ハガキヲ カゾヘル トキニハ
ナント イヒマスカ、
- △イチマイ、ニマイ ト イヒマス。
- サン、イチマイカラ ジフマイマデ
イツテゴランナサイ、

- カゾヘテゴランナサイ、
- △イチマイ、ニマイ、……。
- ジドウシヤヲ カゾヘル トキニハ ナ
ント イヒマスカ、

九

要

旨

「コレ(ツレ、アレ)ハ○○デス(カ)」「コレ(ツレ、アレ)ハ○○ノ○○デス(カ)」の文型と「ハ
イ」「イエエ」の肯定否定の叙述を修練する。

要

領

既習の教材に於いて既に一應指導した文型の總括復習的の立場において指導する。
この際も事物または掛圖(略畫)等を指示することと聯關して指導することが肝要である。
これまでの教材の指導に於いては、聽いて復唱するか、答へるかであつたが、ここでは、問ふ文型で
いはせる方法を講ずることが新しく指導する問題であることに注意すべきである。而して「カ」が疑問

詞であることを説明でなく、練習で會得させることが肝要である。

「コレハナンドスカ」の「コレ」について「アレ」もここで反復練習させる。「アレ」ハ話手からもその相手からも離れた場所にあるものを指す代名詞である。「コレ」「ツレ」「アレ」の相異を距離を基準として、それぞれ近・中・遠として考へる向きもあるが、むしろ話手とその相手に對する位置を基準として「コレ」ハ話手に近い場所にあるもの「ツレ」ハ相手に近い場所にあるもの、「アレ」は話手からも相手からも離れた場所にあるものとして理解する方が一層根本的である。指導の方法としては、最初は説明よりも、指導の方向に注意させ、直接に會得させることが適切である。

次に問ふ者と答へる者との關係をはつきりさせるために「ワタクシ」と「アナタ」と「○○サン」の關係を意識させる。「ワタクシ」「アナタ」の關係がはつきりした上に「○○サン」を教へ、進んでは「ドナタ」を知らせることによつて、人に關する代名詞が一通り學習できるのである。既にこの大部分のものは既習の教材で指導されてゐるのであるから、讀本と結んで總括的に指導を繰返へせばよい。

肯定・否定の問答形式も反復して練習させる。この教材の文面にはないが肯定の場合の「ハイ、サウデス」否定の場合の「イイエ、サウデハアリマセン」も併せて指導しておくのが適切である。

「○○ノ○○デス」の指導は、既習の「ワタクシ」「アナタ」を基礎としてその所有格を學ばせるといふ心構へで指導すれば、自然に理解せられるであらう。

口頭練習問題

必修漢字の指導は既述の通りである。

- コレハ ワタクシノ ホンデスカ、
- △ハイ、サウデス。
- コレハ アナタノ ホンデスカ、
- △イイエ、サウデハアリマセン。
- コレハ ナカムラサンノ バウシデスカ、
- △ハイ、サウデス。
- コレハ ドナタノ エンビツデスカ、
- △サンノデス。
- コノ バウシハ ドナタノデスカ、
- △サンノ(バウシ)デス。
- コノ ホンハ ワタクシノデスカ アナタノデスカ、
- △アナタノデス。
- コノ エンビツハ ワタクシノデスカ アナタノデスカ、
- △アナタノデス。
- アノ カサハ ドナタノデスカ、
- △サンノデス。

要

旨

十 アイサツ

十 アイサツ

朝の挨拶を修得させ、相手によつて言葉遣ひの違ふことを知らせる。

要 領

室外に於ける挨拶であるから、教室では取扱ひにくいだが、掛圖や繪畫によつてその情景を想像させ、この場面の挨拶を修得させるやうにしなければならない。教材の性質上、如上の如く繪畫による學習を行はせなくてはならないが、できるだけ日常身邊の事態に即して練習を行ひ、挨拶ができるやうにすることが肝要である。

「オハヤウゴザイマス」と「オハヤウ」とは、日常の挨拶のことばとしては既に耳なれてゐることであらうが、相手によつて區別しなければならぬことを確實に會得させなければならぬ。

なほ、「イラツシヤイマスカ」「イラツシヤイマセー」といふ長上に對する敬語の用法を會得させることが肝要である。

挨拶の言葉は、指導者が掛圖又は繪畫を指し示しながら、目下の者を指して、「オハヤウゴザイマス」といひ、目上の者を指しながら、「オハヤウ」といふ。同様にして、交互に挨拶を交してゐる讀本の順序により、讀本の言葉を指導者が繰返していふ。この際たゞことばだけの指導でなく身振り表情の指導も心の指導と共に忘れてはならない。

次に指導者と、學習者が相手となつて、讀本に基づいて、挨拶の言葉を練習する。その際、「(オ)テ

ンキ」「ドチラヘ」「チヨット」「テイシヤチャウマデ」等の新語の指導を適切に行ふ。

而して、これらの挨拶用語、特に敬語の用法は説明によつて理會させるのでなく、用例によつて會得させることが肝要である。

十一 ミ チ デ

要 旨

屋外において道をさく時の挨拶や會話の仕方を修練させるとともに新語の話し方練習をさせる。

要 領

掛圖・繪畫を利用して會話に導入する。道路上で二人が話合つてゐる場面を描いた繪を見せる。

「コノヒトハナニヲシテキマスカ」「ハナシヲシテキマス」から進んで、「アイサツヲシテキマス」に、更に「ナニカタツネテキマス」に進展する。「ドコデハナシヲシテキマスカ」と問ひ、「ミチデハナシテキマス」と答へさせて、「ミチデ」の語を理解させる。

「コレハドコデスカ」と問ひ「郵便局です」と答へ、「コノヒトハ、ドコヘイクノデスカ」と繪を指しながら問ふ。「イウビンキヨクニイキマス」と答へさせる。「ドチラヘイツタラヨイデセウ」と問ひ「アチラヘイキマス」の答を得るやうにする。更に繪によつて、「ハシヲワタリマス」「ミギヘイキマス」

「右へマガリマスト等を指し示しながら、練習させる。
御禮を言ふ態度を示しながら「アリガタウゴザイマス」の語を指導者がいひ、繰返す。
次いで、讀本を讀ませ、言葉を理會させてから、學習者を二人宛出して、この會話の練習を反復練習させる。その際、「オタヅネ」「郵便局」「ドチラへ」「イツタラ」「ハシ」「ワタツテ」「ミギ」「マガル」「アリガタウ」等の新語は特に留意して、發音を正しく、反復して用法を理會させることが肝要である。
「イクノデスガ」の「ガ」の理解は困難であるが、
「テンキハヨイガサムイ」
「ナガイキデスガホソイ」
等の用例を多く示し、練習させて體得させるやうにする。

十二 カ ヒ モ ノ

要 旨

店で物を買ふ場合の會話を修得させ、併せて金錢の計算について習熟させる。

要 領

店頭で買物をしてゐる場面、店には洗面器、その他雜貨を並べてある繪畫・掛圖を用意して、この繪

を直觀させて、話合ひに導入するのが適切である。

繪の人物を指し示し「コレハダレデスカ」と問ひ、「オキヤクサンデス」「ソレハミセノヒトデス」を理解させる。「ナニヲカツテキマスカ」と問ひ「センメンキヲカツテキマス」と答へさせる。

「八十セン」「一エン二十セン」の値段をつけたものを用意する。「コレハイクラデスカ」と問ひ、「八十センデス」「一エン二十センデス」とそれぞれ答へさせる。次に一圓二十錢と八十錢とを比較しながら「コチラガタカイデス」「コチラガヤスイデス」といひ繰返す。

次に讀本を讀ませる。讀みの上に立つて、店の人とお客とを指名して出し、二人にこの會話をさせ、同様にして二人づつ何回となく反復練習させる。

なほこの教材の指導に當つて、金錢の數へ方を十圓程度まで練習させ、その計算に習熟させるやうにすることが肝要である。

十三 ハ ウ モ ン

要 旨

他人の家を訪問する時の挨拶と作法と會話を修得させ、敬語の用法に習熟させる。

要 領

十二 カヒモノ 十三 ハウモン

挿畫の擴大したものを用意すると便利である。

「コノヒトハダレデスカ」「オキヤクデス」「コノヒトハダレデスカ」「ウチノヒトデス」を指導して、二人の人物の立場を先づ明らかにする。「フタリハナニヲシテキマスカ」「アイサツヲシテキマス」の指導を「十アイサツ」の教材を基準として練習させ、「ハウモン」の意味の理會へ導く。

「ゴメンクダサイ」「イラッシャイマセ」は前課の理會に立つての復習的取扱をなし、本課への導入をはかる。「オメニカカリタイ」「シバラクオマチクダサイ」「オイデニナリマシタ」「オトホシシナサイ」「オマタセイタシマシタ」「ドウゾオアガリクダサイ」はすべて新しい語であり、新しい文型である。前課と同様に、言葉を動作と關聯づけて、何遍も繰返して實際に練習し、用法を會得させる。特に敬語が多く、中に、父の言葉が混入してゐるが、「サウカ」は子供に對する言葉、「オトホシシナサイ」はお客を對象とした言葉であることに注意すべきである。

讀本の讀みを行つた後、客、取次、主人の三人を配して、何回も繰返して練習させることが肝要である。

なほ、この教材の指導に當つては、教材に示された會話の指導にとどまらず、かうした言葉を表す禮法を言葉と結んで躰け、生活指導にまで進展するやうにしなければならぬ。

十四 國語ノケイコ

要

旨

國語の稽古についての會話を讀ませて、國語上達への修練上の心構と態度を知らせ、國語習熟への關心を昂める。

要

領

會話教材として前課よりの系統を引くものであるが、この教材から、稍程度も高く、構文の上に複雑な表現が示されてゐることに留意することが必要である。しかし讀みへ入る以前に讀本を離れて、専ら言語訓練をなし、總括的な立場に於いて讀本を取扱ふことはやはり従前と同じである。

「アナタハ、タイヘン國語がオジャウズデスネ」とまづ相手の國語のうまさを賞め、「ドウシテ、ソシナニオジャウズニナリマシタカ」と上達の方法を尋ねてゐる。これに對して、「イツデモ國語ヲツカフヤウニシテキマス」と答へて、國語上達の方途は、國語の常用にあることを示唆してゐる。ここに凡て國語を學習する者に與へられる教訓がある。國語を知るに止まらず、國語を常用するところに國語の上達があり、皇民となり得る道があることを指導する。

「デモ、ハジメハバヅカシクアリマセンデシタカ。」は、一應多くのものが感ずることの質疑である。

が、これに答へて、「ハヅカシイトオモツテツカハナイト、イツマデモジャウズニナリマセンヨ。」といつてゐるのは、そのまま學習者への教へである。ここで「ハヅカシイ」といつたのは、笑はれはしないかと思つたからの氣持からである。「ツカハナイト——ジャウズニナリマセンヨ」は前章をうけて、更に強調されてゐる。「サウデスネ」は國語上達の鍵「イツモツカフ」ことによつてのみ國語力は向上することを諭されて、深く自らを反省して、そこに自ら出た言葉であり、これは、相手の者の言葉の肯定である。「ナルベク國語ヲツカフヤウニイタシマセウ」と決意した言葉をうけ、この言葉の未だ弱いことをついて、「一シャウケンメイニケイコシテハヤクジャウズニナリマセウ」と力強く叫ぶ相手の立場を讀みとり、此の教材の會話内容は、そのまゝ、國語學習者への教訓として、國語學習への努力を促進せしむべきである。

讀本の讀みを終つて後、二人宛學習者を指名して、この教材に基づいて會話の練習を反復することは既習教材學習の場合と等しく肝要なことである。

十五 國 旗

要 旨

會話文を通して挨拶、會話の用法を修得させ、國旗の取扱について知らせるとともに日の丸の歌を修

得させて國旗に對する國民的情操を陶冶する。

要 領

「コンニチハ」挨拶の言葉として既出の「オハヤウゴザイマス」「ゴメンクダサイ」と連關して用法を知らせる。「オヤ」は「マア」と同じく來客（輔導員サン）を見て軽い驚きの聲である。しかもこの驚きの中には親しみの情が含まれて發せられた言葉であると解すべきである。「オタク」は「アナタノオウチ」の意である。

國旗を立てるのは「祝日・大祭日・記念日」である。なほこの外、大詔奉戴日その他特に定められた日があることも知らせねばならない。國旗を立てるのは、立てることに意義を持たせねばならない。即ち國旗を立てる日の意義・國旗を立てる時の作法・心構・國旗の取扱等についても指導者の補説によつて十分理解させなければならない。祝祭日は讀本二十七頁に一覽表があるから、その各々について説明する。

二十六頁の歌は、先づ歌唱させる。快く歌ふことによつて日の丸の持つ美しさ勇ましさを感じさせるべきである。而して歌唱とともに、「白地」「朝日」「イキホヒ」「イサマシ」等の語は國旗を見せて直感させ、或は用例を示して言葉を體得させなければならない。

なほ、この歌詞は從來歌はれたもので國民學校に現在歌はれてゐる歌とは少し異なつてゐる。

備考

わが國の祝祭日は、我が國體に淵源してゐて、政治も徳教も皆この祝祭と一致して離れない關係にある。天皇陛下におかせられては祝日・大祭日には嚴肅な御祭儀を擧げさせられて御鄭重に皇祖皇宗をお祭りになり、皇祖皇宗の御心を體せられて我が國をお治めになる。われら臣民は、この尊い大御心を體し奉つて祝日には慶祝の意を示し、大祭日には肅敬の誠をつくして寶祚の無窮を祈り奉り、愈々その本分を盡す覺悟を深くしなければならぬ。

新年は年の始の祝日である。宮中では一日早朝には四方拜並びに歳旦祭の儀が行はれ、同日及び二日に新年朝賀の儀を五日に新年宴會の儀を行はせられる。

紀元節は、神武天皇が始めて御即位の禮を擧げさせられた日である。宮中では、賢所・皇靈殿・神殿に於て紀元節祭を行はせ給ひ、天皇陛下御親祭あらせられる。ついで拜賀の儀・參賀の儀・宴會の儀がある。

天長節は、天皇陛下の御降誕日を祝し、聖壽の無窮を祈り奉るのである。

明治節は、明治天皇の御遺徳を仰ぎ奉り、明治の大御代を追憶する祝日である。天長節・明治節にも宮中では賢所・皇靈殿・神殿の御祭典について、拜賀の儀、參賀の儀、宴會の儀を行はせられる。

元始祭は、歳首に當り、天皇陛下御親ら賢所に皇祖、天照大神を、皇靈殿に御歴代の皇靈を、又神殿

に天神地祇をお祭りになつて、皇位の本始を壽ぎまつり孝敬をのべさせられる。

春季皇靈祭は、春分の日、秋季皇靈祭は秋分の日、何れも御親ら御歴代の皇靈を皇靈殿にお祭りになる。

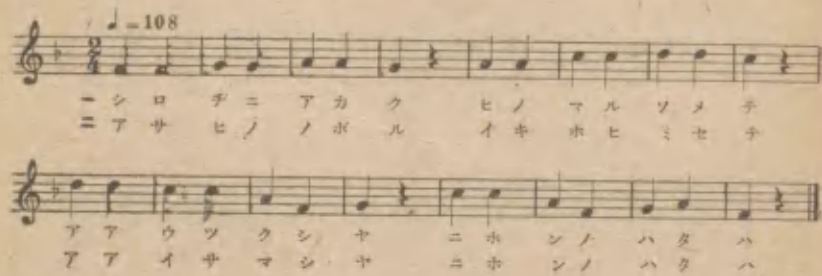
神武天皇祭は、御親ら皇靈殿に第一代の天皇、神武天皇をお祭りになり、大正天皇祭は同じく皇靈殿に先帝、大正天皇をお祭りになる。

神嘗祭は、その年の新穀を諸神に先立つて伊勢の神宮に獻らしめ給ふ御祭で、皇祖、天照大神の神恩を感謝せさせ給ふのである。宮中では、當日、天皇陛下御親ら先づ神宮を御遙拜あらせられ、ついで賢所を御親祭あらせられる。又、神宮には勅使を參向せしめて幣帛を奉らしめられる。

新嘗祭は、神嘉殿に、天照大神を始め奉り、天神地祇を御招請になつて當年の新穀をもつて御祭りになり御親らも之をさこしめされる。もともとこの御祭は、天皇陛下が新穀をさこし

ヒノマルノハタ

十五國旗



めされるに就いて先づ神々をお祭りになるのである。夕の儀と暁の儀とがあつて霜の置く寒夜を徹して御親祭あらせられる。又勅使を神宮に参向せしめて幣帛を奉らしめられ、官國幣社にも幣帛を奉らしめられる。これはその年二月十七日の祈年祭に神宮並びに官國幣社に幣帛を奉らせられて億兆の爲に、五穀の豊熟をお祈りになつた、その御報賽ともなるのである。

十六 オテツダヒ

要 旨

會話文を通して、時局下相互扶助の精神を養ひ、併せて、挨拶會話の用法に習熟させる。

要 領

冒頭の一節は、道路上で、「山口サン」にあひ、行く先を問ふ形を示した挨拶語である。知人に路上であつた時、「ドコヘイラツシヤイマスカ」又は、「ドチラヘイラツシヤイマスカ」「ドコヘオデカケデスカ」「ドチラヘオデカケデスカ」等と問ふのが普通である。

「ハヤクカラ、何ノゴ用デスカ」は、「山口サン」に會つたのが、早朝であつたことを示してゐる。

「山口サン」は「稻刈ノテツダヒ」に行くのである。しかも「松本サンノオウチデハ、ムスコサンガヘイタイニイツテ、ハタラキテガナイノデ」困るであらうことを案じての手傳ひに行くのである。時局

下に於ける隣保相助・相互扶助による一億協力しての増産勤勞のよき手本を示す態度がここに如實に表れてゐるのである。この美しい態度に自分も直ちに同意し、「デハ、私モマキリマセウ」と協力を申し出てゐる。この人の美しく貴い心情も讀みとらせねばならない。しかもこの言葉によつて、この人も、「山口サン」もともに「松本サン」との関係が如何にあるものであるかが了解せられるであらう。

會話の要諦は、對話者の相互の言葉の緊迫性にある。間隙なく、要點を明確に表現する態度が肝要である。この教材をもつて一應會話指導を終るやうに讀本は編纂されてあるので、この點特に留意して、反復練習して、既習の語彙、文型による會話力の修練を圖るべきである。

なほ、この後の取扱と雖も、言語活動の訓練はやはり主體をなして貫行さるべきであることは言ふまでもない。

十七 婦 人 會

要 旨

婦人會の模様を知らせ、協同自營の生活態度を育成する。文の構成から會話の修練をはかり、實踐事項の徹底を期する。

要

領

一頁から十四頁までの教材に於ては専ら入門時の言語訓練を聴き方からはいつて耳の訓練を行ひ、國語の基礎修練を積み、漸く進んで、「十アイサツ」から「十六オテツダヒ」までの教材によつて、國語の會話の初歩を指導して、耳から口への修練を期したのである。本教材からは、教材の表現態度が更に進められて叙述の形式がとつてある。その意味で一步讀む教材へ近づいて來たのであるが、しかしあくまでことばを主にしたものであることに變りはない。

「十七婦人會」と「十八興亞奉公日」は、この立場で書かれてあり、従つて、主我的・主觀的・行動的な生活表現の文章である。即ちこの二つの教材は表現が共鳴・共感的の發表で、思考乃至事實の叙述としない立場に立つた文章であるから、讀むことに先んじて、話し言葉の修練に主體をおくべきである。

ただ、文中次の段階に進むべき過度的表現、即ち讀む文章としての性格をもつた表現が含まれてゐるから、その取扱ひに當つては、「十九生活カルタ」以降の讀解力の養成の基礎として考慮して取扱ふことが肝要である。

「コノアヒダ學校デ婦人會ガアリマシタ」は本文の冒頭をなし、婦人會について叙する本文の時・所・事項を示したものである。以下この「婦人會ガアリマシタ」を詳述したものである。

「校長先生ト協和會の支會長サン」からのお話についての記述はなく、中心は専らその節の決議事項がのべられてある。

「一、氏神様ニオマキリスルコト」は、國民として敬神の誠を捧げるべき本質的のものである。従來朝鮮人には、この生活が缺けてゐた。されば皇民としての生活鍊成徹底のため、讀本による國語指導とともに生活指導にまで進めなければならぬ。

「二、女モナルベク和服ヲキルコト」服装の一體化をねらふものである。眞の皇民化は、衣・食・住の一體に至つて初めて徹底すべきものである。「女モナルベク」である。男は無論内地と一體的であるべきことを示してゐる。

「三、ダイドコロトベンジヨヲセイケツニスルコト」飲食物を調理する臺所の清潔と、最も不淨とされる便所を清潔にすることは、すべてのものの清潔を將來する基礎となる。兎角目につかざる箇所の清潔は忘れられ易く不徹底になり勝である。最も困難なところを清潔にすることによつて、他は自然に解決すると考へられる。

「四、モノヲタイセツニスルコト」物資の尊重・愛護と利用更生は現下非常時局に於て、その十全を期すべきことである。凡ての物は「イタダク」のである。この根本精神を忘却してはならない。

「五、愛國貯金ヲスルコト」大東亞戰爭を完遂するために舉國貯蓄に邁進しなければならぬ。無駄

を省くに止まらず、積極的に生活をさりつめ、貯蓄へ邁進しなければならない。

「六、國語ヲヨクオボエルコト」國語を覺えることは、國語生活への第一歩である。そこから國語常用へ進まねばならないことを理解させなければならない。

本教材は如上の立場に立つて、言語の修練をなし、讀みを練習させる上に、これらの決議事項六項目を生活に實踐せしめるやう國語を通しての皇民生活の徹底を期するやうにすることが肝要である。

口頭練習問題

- 婦人會はいつありましたか。
- 婦人會はどこでありましたか。
- どなたからお話がありましたか。
- 婦人會できめたことはいくつありますか。
- その一つは何ですか。
- どこどこをきれいにすることにきめましたか。
- 貯金をするのはよいことですか。
- 國語をおぼえることはたいせつですか。
- 女はなるべくどんな服をきることにしましたか。
- あなたはものをたいせつにしますか。そまつにしますか。
- せいけつにするといふのはきれいにすることですか。きたなくすることですか。

十八 大詔奉戴日

要旨

大詔奉戴日の生活を叙述した文を讀ませて、生活意識を昂揚し、銃後國民の覺悟を強固にして、皇國臣民たるの自覺に徹せしめる。

要領

興亞奉公日の行事を生活した記録である。大東亞戰爭の宣戰の大詔を奉戴してからは、毎月八日を大詔奉戴日として、興亞奉公日を之に吸収したのである。このままの教材で指導する場合に、このことを補説して的確に了解せしめねばならない。

しかも、この教材は、前課とともに、生活教材最後のものであり、教材そのものが學習者の生活となるべき性質のものである點特に取扱に留意しなければならぬ。表現形式も、片假名最後の教材であり、片假名の指導は、ここまでで一應完結せしめなければならぬ。

行事の内容をなすものは、大詔奉戴日の行事と殆んど同じであるが、宣戰の大詔の奉讀がこれに加へられることを忘れてはならない。

「朝ハヤク」早朝の行事である。まづ君が代の奉唱である。讀本巻頭の君が代の奉唱をしたのである。

これまでには、學習者もすべて君が代を暗誦し、正しく奉唱し得るやうにしておくべきである。なほ君が代の意味も、この教材の指導とともに一應解説して理解せしめるべきである。

「国旗がアガリマシタ」国旗掲揚である。掲揚に際しての儀禮、即ち敬虔な心で注目し、竿頭に上るを待つて直る。といふ作法も實踐して訓練すべきである。

「黙禱」は大東亞戦争の必勝を祈願しての敬虔なる黙禱である。

「皇國臣民の誓詞」は暗誦せしめなければならぬ。各節の解釋も施し、意義を理會した上の、皇民としての誓ひを堅めるやう、單なる口誦に終ることなき誓ひをするやう指導する。

「カノコモツタ コエ」は真に誓詞を胸中より唱へることによつてはじめて出る聲である。

「氏神様ニオマキリシマシタ」「ミチノサウヂヲシマシタ」は當日の團體的作業の主なるものである。氏神様にまゐつて皇民精神を昂め「ミチノサウヂヲシ」て勤勞作業による奉仕を行つたのである。

「支會長サン」のいふ「ケサノキモチデ、メイメイノ仕事ニハゲミマセウ」は學習者すべての者への直接の教である。讀本を讀むことは、國語による國民生活の實踐を目ざして修練されなければならないことをここでも強く言ひ得るのである。

口頭練習問題

○大詔奉戴日はいつですか。

○大詔奉戴日にはいつもどこにあつてしま

すか。

○どんなうたを歌ひましたか。

○国旗をあげましたか。

○それから何をしましたか。

○黙禱のあとで何をとなへましたか。

○どんな聲で誓詞をとなへましたか。

○式がすんでからどこにおまゐりましたか。

か。

○それからどこをさうぢしましたか。

○さうぢをするとききれいになりますか。き

たなくならずか。

○支會長さんはわかれるときに何をおつし

やいましたか。

十九 生活カルタ

要旨

五十音及びいろは歌を通して平假名の讀み方及び書き方に習熟せしめ、生活カルタの内容を理會せしめて皇民生活の鍊成を圖る。

要領

先づ五十音圖によつて示された平假名の讀みを指導する。これは讀本巻頭の片假名五十音による事物

名稱の指導と關聯して、五十音の暗誦を利用し、五十音の各音にこの平假名を當嵌めて行く方法によつて先づ讀めるやうに導くのが適切である。而してこの五十音の一字一字の讀みの指導に於て、これまで發音の不正確なものはここで矯正する。反復して幾回となく讀ませて平假名の讀みを徹底させ、次の教材からの讀みに支障なきやう、稍機械的に流れても繰返し練習するやうにすべきである。

讀みが確實になれば、書くことの指導も加ふべきであるが、書くことは、一通り指導して爾後の教材學習を徹底させる中に、書寫能力を養へばよい。あくまでこの教材では、讀みに主力を注ぐべきである。

「生活カルタ」は、上欄の平假名五十音の第二列音を語頭に持つ生活鍊成項目を韻文形式で表したものである。讀みを繰返して、先づ暗誦にまで導くことが肝要である。

「イツモ着物ハサツバリト」 (イツモ着物ハサツバリトセヨ)

「氣ヲツケマセウ衛生ニ」 (衛生ニ氣ヲツケマセウ)

「シンバウシマセウ國ノ爲」 (國ノ爲シンバウシマセウ)

「チリモツモレバ山トナル」 (チリモツモレバ山ノヤウニ大キクナル)

「忍苦鍛鍊身ヲ立テヨ」 (忍苦鍛鍊シテ立派ナ者ニナレ)

「費用ハブイテ國債ヲ」 (費用ヲハブイテ國債ヲ買ヘ)

「見ムクナ邪教ヲ迷信ヲ」 (邪教ヲ見ムクナ迷信ヲ見ムクナ)

「イタハレ子供ヲ老人ヲ」 (子供ヲイタハレ、老人ヲイタハレ)

「リクツハヌキニ精ヲ出セ」 (リクツハヌキニシテ精ヲ出セ)

「慰問袋ニ眞心ヲ」 (慰問袋ニ眞心ヲコメテ送レ)

「ウント努メヨ産業報國」 (産業報國ニウント努メヨ)

以上の如く、各項の標語を中樞として、敷衍徹底、戦時下銃後國民の生活信條として實踐せしむるやう指導すべきである。

標語の表現は、最も強調すべき言葉を句頭に、且は韻律・調子を整へるために語型の上に、正常なるものと異なる表現が多い。その點指導に當つては、正常な文の成文に置換して理解せしめることが大切である。概念的指導に陥ることなく、あくまで讀みに即して、言葉によつて事項の理會と實踐とを行はせることが肝要なことである。

「いろは歌」の指導に當つては、先づ前頁の五十音の復習をなし、平假名の讀みを徹底させ、然る後平假名の書寫を練習する。いろは歌の持つ意味は指導する必要はなく、専ら假名を讀むこと書くことに努むべきものである。

口頭練習問題

○きものはどんなにしたらよいのですか。 — ○衛生にきをつけるのはよいことですか

わるいことですか。
 ○國の爲にどうしたらよいのですか。
 ○國債を買ふことは國の爲になりますか。
 ○子供や老人はどうすればよいのですか。

二十 天皇陛下

○兵隊さんには何を送りますか。
 ○精を出すといふのはどうすることですか。

要旨

至尊至大の天皇の大御代に感激し、皇國臣民たるの喜びをもつて盡忠の誠を致す覺悟を鞏固にさせる。

要領

「天皇陛下は我が大日本帝國をお治めになる、たつとい御方であらせられます」肇國の昔よりわが大日本帝國は天皇陛下がお治めくださる國である。天壤とともに窮りなく彌々ますます天皇をいただいてわが皇國は榮えゆく國である。大日本帝國憲法第一條にも「大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」とある。しかも、これは天孫降臨の古より定まつた不動の國體である。連綿と一系の天皇によつて治め

海ゆかば

二十 天皇陛下

力強 4/4 -72-80 信時 潔 曲

うまのかばみづくかば
 わやとゆかばくさむすかば
 れおほほーまみのへにこそしな
 かへりみはせじ

られる皇國は、また限りなく尊き天皇の國である。天皇は現人神として神ながら皇國をしるしめすのである。

「天皇陛下は常に臣民を子のやうにおいつくしみになつていらつしやいます」歴代天皇の萬民の上に垂れさせ給ふ御仁慈の程は、國史の上に限りになく拜される。御詔勅・御製の上にも拜される。上に聖天子を戴く皇國臣民は、世界無比の幸ある國民である。ここに父祖の大君に仕へまつたあとをそのまま、今またわれら誠心をもつて大君に仕へまつる喜びをしみじみと思ふとき、「海行かば」の決意はいやまざるのである。天皇陛下の崇高至大にましますことを補説によつて充分感得させ、大君につかへまつる心をいよいよ鞏固にしなければならぬ。

國語としての取扱に於ては、「お治め」「御方」「お

いづくしみ」「あらせられます」等の指導に特に留意しなければならない。

「海行かば」は先づ暗誦させ、歌唱させる指導が大切である。歌詞は、萬葉集中大伴家持の長歌中より採つたもので、盡忠の心のみなきるわが國民の三千年來つぎつぎと來た精神を、今またわれら感激の心をもつて歌ふべきである。

(釋) 海を行くなら屍を水にひたし、山を行くなら屍を野にさらして、草の生えるに任せることも意とせず、常に身命をささげて大君のほとりに死なう、わが身を顧みるやうなことはすまい。

口頭練習問題

○日本帝國をお治めになつていらつしやる方はどなたですか。

○私共は天皇陛下の爲にどうすればよいのですか。

○天皇陛下は臣民をどんな風においつくしみになつていらつしやいますか。

○「海行かば」といふ歌はどんな氣持を表はしてゐますか。

○日本帝國の臣民はなぜしあはせてですか。

二十一 は が き

要 旨

お禮のはがき文を通して、葉書の書き方及び郵便に関する常識を養ふ。

要 領

まづこの教材は「はがき」文であることを指導する。

次いで本文を読ませて、何の手紙を書いたのかを知らせ、いつ、誰が、誰に出す手紙であるかを知らせる。

本文の指導に於いては、「しのきよく」「見事な」「青森林檜」等の語は特に指導に留意すべきである。文章としては、極めて簡単なはがき文ではあるが、始めの挨拶、本文、結びとまとめられてゐる點は「はがき」文制作上の模範とすべきものとしてその指導を的確にすべきである。

表の書き方、先方の住所・宛名・自分の住所・署名・及び日附等の記入法も十分、讀本の例を模範として理解させなければならぬ。

口頭練習問題

○はがきは一枚いくらですか。

すか。

○宛名はどちら側に書きますか。

○どんな字で宛名を書くことが必要ですか。

○はがきには差出人の住所姓名も書くので

二十一 は が き

○宛名が間違つてゐるとどうなりますか。
○林檎は野菜ですか果物ですか。

○青森といふのは人の名前ですか、土地の名前ですか。

二十二 朝鮮 より

要 旨

手紙文の書き方を知らせ、郵便に關する常識を養ふ。

要 領

前課は「はがき」文であるが、これは手紙文であることを知らせる。手紙の用件は、「志願兵制度の實施と自分の覺悟・創氏制度の決定と、自分の創氏改名の實施」を通知する文である。而してこの手紙文に於いても、前が挨拶・本文・結びの整つた文であることを知らせ、用件を的確に示されてゐる點も指導上肝要なことである。

「拜啓」「謹んで申しあげます」の意で、通常手紙文の冒頭に書く習慣的な用語であり、この外「謹啓・肅啓・拜呈」等も用ひられる。返事の場合は、「拜復」が普通用ひられる。

挨拶は先づ氣候の様子、土地の近況、次いで自分等の動靜をのべる。次に本文（ここでは、志願兵制

度の實施と自分の覺悟・創氏改名の實施）を簡明に而も要點は的確に示し、結びとして、「皆様によりしくお傳へ下さい。敬具」と簡潔に結んでゐる。

「敬具」は手紙の結びに書く用語で「敬白・早々・頓首」等も用ひられる。

手紙文の場合は、特に文尾にしるべき、日附・署名・宛名の書き方を指導する。

（注意）

本文の指導に當つては、昭和十九年度より徴兵制度が實施されて、兵役の義務を朝鮮同胞も内地人と同様負ふこととなり、一視同仁、有難き大御心の程に感激して、いよいよ盡忠の誠をいたすべき覺悟を鞏固にすべきである。

封筒の書き方は、四十六頁の如く、表に先方の住所・宛名を端正にしたため、切手を左肩に正しく貼ること。但し、讀本の圖に示された切手は、郵便規程改正前のもので、昭和十九年四月一日よりは七錢切手を貼るべきであることを注意する。

裏面には、住所・署名・日附を適當な場所に明瞭に書くやうに指導することが肝要である。封筒は規格のものを用ひ、滿洲國その他外地には二重封筒を使用しないやう注意を要する。

口頭練習問題

○れんげうといふのは何ですか。

○れんげうはいつ咲きますか。

- 朝鮮の人は兵隊になることができますか。
- 氏を設けるといふのはどんなことですか。
- これははがきに書いたのですか。

- 手紙を出すには何を貼りますか。
- いくらの切手を貼るのですか。
- 切手はどこに貼るのですか。
- この手紙を出した人は誰ですか。

二十三 まごころ

要旨

非常時局下に於ける職域奉公の敢闘精神を讀みとらせ、銃後國民の決戦生活の完遂精神の昂揚をはかる。

要領

福岡縣の炭鑛にあつた實話を教材としたものである。炭鑛の業務主任の部下を思ふ慈愛の心持、それに対する崔君の職域に捧げるあつばれの精神態度を讀みとらせることが肝要である。

「お氣のどくです。すぐ郷里へ歸つておいでなさい」は崔君の立場を思ひ衷心より同情し、便宜をはかる主任の美しい心が見られる。これに對して崔君は「御親切はありがたうぞんじますか」といつて、この主任の親切に感謝の意を捧げつつも、「炭鑛で働く氣持は、兵隊さんが戦場に臨むのと同じです。」と堅い決戦下銃後國民としての職域奉公の決意を示してゐる。しかも、「姉も父も——喜んでくれるに違ひないと思ひます」と亡き姉・父の氣持をのべてゐるところに、崔君のこの氣持を持たしめる上に姉・父の氣持をも加へてあくまで職域への挺身をめざす尊い崔君の態度と精神がうかがはれる。歸郷しないのは、自己の勝手ではなく、家族の總意であると強調してゐる。この態度と精神こそ十分理解・徹底せしむべきものである。

口頭練習問題

- この話はどこにあつたのですか。
- 炭鑛といふのは何をするとおころですか。
- 崔君のお父さんやお姉さんはどうしたのですか。
- 勞務主任は崔君に何といひましたか。

- 崔君はすぐ郷里へ歸りましたか。
- 崔君はどんな氣持で働いてゐるのですか。
- 崔君のお父さんや姉さんは崔君が歸るのを喜ぶてせうか 歸らないで石炭を掘る

のを喜ぶてせうか。

○勞務主任は崔君の氣持に感心しました

○崔君はどうしましたか。

か。

要旨

愛馬とともに進軍する皇軍勇士の猛くもやさしい精神を讀みとらせ、歌唱に習熟せしめて、勇まじき中に優なる皇軍精神を感得させる。

要領

- (一) 是愛馬とともに征途にのぼり、幾月の間、愛馬と自分と一つになつて進撃する勇士の人馬一體の心情があふれてゐる。
- (二) はすぎし激戦のあとの樂しき憩ひ、その間にも明日の激戦を期して愛馬をいたはる美しい氣持が見える。
- (三) は砲彈雨飛の中を、愛馬とともに濁流を渡つた決死の渡河、その成功のあかつきに涙とともに愛馬に感謝して秣を興へる勇士の優しい氣持が見られる。
- (四) は自分に送つてくれた慰問袋のお守りを愛馬にかけて馬の身の健在を祈るころ、この心に感じてこそ、塵まみれの勇士に愛馬は顔よせてなつくのである。それをなぜ、このきたない俺にお前はなつくのかといふ勇士の氣持は、自ら涙ぐむものがある。
- (五) は人馬一體の愛馬とともに敵陣を蹴散らし攻略して凱歌をあげる。その感激の勝悶だ、愛馬よ、共にいななけと常に愛馬とともに生き、喜び、悲しむ美しい氣持——ここに皇軍の強さがある——を感じる。
- (六) は晴れの凱歌をあげての入城である。勇士の感激と光榮はこれにしくものはない。この感激・喜

愛馬進軍歌

歩調=倍々テ♩ -112 陸軍省指定

く - に を て て か ら い く つ - き も
 と - も に し の き て こ の う ま と
 せ - め て す す ん - だ や ま や か は
 と つ た - な づ な - に ち か か よ ふ

二十四 愛馬進軍歌

びの中に、愛馬への感謝を忘れない心情——これが皇軍勇士の眞の姿である。かくて、この軍歌の大意を補説によつて知らせ、勇士の心情のままに、やがて自らの愛馬の心をこめて曲につて歌ふことを練習させる。しかして、歌詞はその氣持を理會させることにとどめ、語句の一一の解釋等にあまり多くの時間をかけることなく、情調を感得させ、歌唱させることに主力をおくべきである。(曲)

二十五 神社参拜

要 旨

神社参拜の様子を叙述した文章を讀ませて、敬神の念に培ひ、拜禮の作法を指導する。

要 領

部落に奉祠する氏神様に参拜した生活記録の文である。

叙述の順序は参拜の順に随つて、参道を進み、境内の橋を渡り、水屋で手を洗ひ、口をすすぎ、神殿の前で拍手をうつて拜禮する。歸途、勤勞報國隊の青年たちにあつたことをのべてゐる。

指導に當つては、先づ何遍も繰返して讀ませる。然る後、参拜の順序を叙述の順を追うて讀みとらせ、神社参拜の作法を知らせる。「しぜん」と心が引しまつて」は参道を進むとき、杉の木立の中を歩む作者

の心がすでに拜禮の氣持を昂めてゐることが知られる。

「あたりはまだうす暗くて」早朝に参拜したことがわかる。神社参拜の時は早朝参拜を常とするわが國民の生活姿態がある。一日の一年の淨き心をささげ奉るのである。不淨を見ず、聞かず、爲さざる早朝、先づ神社参拜をするのである。

「橋の所に來ると靜かに手を合はせてをがんでゐる人の姿が見えました」は前述のことを意味してゐるのである。

「ち水屋で手を洗ひ口をすすいで」は身體の外部の「手」身體の内部としての「口」を淨めるのである。齋戒沐浴、すべての不淨を去つて神前にぬかづく敬虔な作法である。單に手を洗ひ、口をすすぐのではない。すべてを祓ひ淨めることでなければならぬ。

「拍手をうつてをがみました」拜禮の作法は、「二禮・二拍手・一禮」である。正式参拜の作法を指導することを忘れてはならない。

「勤勞報國隊」の「青年たち」は「鍬を肩にかついで」早朝より作業に従事するのである。その報國の精神は、また同じく神社に参拜することからはじめられる。

國民の凡ての生活は、神にはじまり神に終る。神國日本の國民生活はすべて神に歸一され、神が大本をなす。この皇民精神と皇民としての生活を神に歸一することを理會させ、學習者の生活もすべてここ

に到達せしめなければならぬ。

「参拜」「参道」「境内」「お水屋」「神殿」「拍手」「勤勞報國隊」等の語、は神社参拜の實踐・指導者の補説によつて理解せしめる。

口頭練習問題

- いつ氏神様におまゐりしましたか。
- 参道の兩側には何が立ち並んでゐますか。
- 境内ではどんな音がきこえましたか。
- お水屋で何をしましたか。
- をがむときには拍手をうちますか。
- おまゐりをすましてからどんな人たちにあひましたか。
- 何をかついてゐましたか。
- これから何をするのでせうか。

二十六日の本

要旨

わが國の國號「日本」の意義を明らかにし、肇國以來の國民生活の根本精神を理解させ、皇國臣民として本分を完うするの精神を涵養する。

要領

領

冒頭六行は國體の根本を説明したものである。建國以來二千六百餘年、皇統連綿として今日に及び、天地とともに無窮に進展する皇國の姿こそ「日本の名にふさはしい」朝日の如く「美しく、勇ましい」日本である。朝日の如くある日本は、常に國も人も若く新しく、しかも美しく勇ましいのである。父祖より相承け、常に舊くして常に新しい誠心と忠義の一念こそ萬古不易、永遠に新しく繼承して大君に捧げまつる皇民のまことである。

この生成發展、舊くして新しい、常に二千六百年の歴史の中に今の歴史に生きる皇民のつとめは、「皇室のおんさかえを祈り、み國のためには、いつも美しく勇ましい心でお盡くし」する忠良なる臣民であらねばならぬ。

この教材のもつ中心は、ここにある。

何遍も繰返して讀ませ、指導者の的確な補説によつて、國史の中核にふれしめ、眞に皇國民として生きる生活を修練せしめるやうに教材を通して指導しなければならぬ。

「愛國行進曲」の指導に於ては、既習韻文教材の場合と等しく、先づ暗誦せしめ、歌唱せしめるやうにすべきである。歌詞の説明は概要を知解せしめる程度にとどめて然るべく、一語一句の解釋はその必要がない。

愛國行進曲

内閣情報部 曲

♩ - 112 - 120

みよと うかいの たらあけて びくしつ
 たかく かまやけば てんちのせいき
 はつらつと きばうはやとる おほやし
 まお、せいらいのあさぐも
 に - そびゆるふじのすかたごと
 きんおうむけつ ゆるきなさわがに
 - ばんの - はこりなれ -

- 六〇
- 愛國行進曲
- 一 見よ東海の空明けて
旭日高く輝けば
天地の正氣激刺と
希望は躍る大八州
お、清國の朝雲に
舞ゆる富士の姿こそ
金甌無缺揺ぎなき
我が日本の誇なれ
 - 二 起て一糸の大君を
光と永久に戴きて
臣民我等皆共に
御稜威に翻はん大使命
往け八紘を宇となし
四海の人を導きて
正しき平和うち建てん
理想は花と咲き躍る
 - 三 いま幾度か我が上に
試練の嵐 吹るとも
斷乎と守れその正義
進まん道は一つのみ
あゝ悠遠の神代より
轟く歩調うけつぎて
大行進の行く彼方
皇國つねに榮あれ

歌詞第一節は、正氣激刺として希望に躍る皇國の若く雄々しき氣持を歌つたものであり、本文と最も連關してゐるものである。

第二節は、富士の靈峰の如く、萬古不易・金甌無缺世界に冠たる皇國の秀逸せる國體を歌つたものであり、

第三節は、萬世一系の天皇を戴く世界無比の國體をもつ皇國に生を享けたるものの覺悟を歌ひ、
 第四節は、八紘を宇とし、東亞新秩序建設と世界平和を建設すべき皇民の理想完遂を期したものであり、

第五節は、正義のため、あらゆる試煉をのりこえて、斷乎邁進する不退轉の決意をのべ、
 第六節は、かくして悠遠無窮の皇國の榮光を祈念して皇民としての凡ての誠をここに包藏して結んでゐる。

各節を通じ、全詩を貫いて流れる愛國至醇のまごころの發露を學習者の心とせしめるやう、激刺と歌唱せしめて感得させるやうにとめる。(曲)

口頭練習問題

○初めて天皇のみくらゐにおつきになつたのはどなたですか。

○今から何年前ですか。

○神武天皇の御子孫が代々みくらゐにおつ

きになりましたか。

○日本はどんないきほひでさかえて來ましたか。

○日の出の姿はどんなですか。

○日の本と呼ばれたのは何故ですか。

○私たちの祖先はどんな心で天皇に忠義をつくして來ましたか。

○私たちはどうすればよいのでせう。

○補 説

卷末提出漢字は、各教材に表れる毎に、全振假名漢字中特に必修の漢字のみを示したものである。

随つて、これらの七十八字は、讀むこと、書くことが完全に出来るやうにすべきであり、他の漢字は讀解し得るにとどめてよ。

その指導は、各教材の指導の際、讀みの指導に随つて、適當に指導すべきであるが、今、この讀本全課を學習し終つた後、總括的にこの一覽表によつて、指導を徹底することも考へられる。

五十音圖は、漢字同様、總括的に、發音、書寫指導として反復練習せしめる。なほ、五十音は、生活上種々の言語の發音の基本となるばかりでなく、その排列は種々のものに利用されてゐるから、この順序排列を暗誦せしめることが肝要である。

昭和十九年三月二十日 印刷
昭和十九年三月二十五日 發行

協和國語讀本指導要領

東京都麹町區大手町一丁目七番地
厚生省內

著作兼 發行者 財團 中央 協和 會

代表者 森 高 健 一

東京都品川區東大崎三ノ二三九番地

印刷所 中屋印刷株式會社

(重訂二九) 牛 丸 勝 三 郎

東京都麹町區大手町一丁目七番地 厚生省內

發行所

財團 中央 協和 會
法人

〔日本出版會會員 二一七〇〇三番〕

